

2022 年度学童保育指導員研修
「困難な養育環境にある子どもの理解」

2023 年 1 月 29 日(日)

島田歩実

心がとても動いた、衝撃的な、そして自分にとって非常に実りある時間でした。この研修を受講することができて良かったと感じました。

まず、様々な現実を知りました。「日本の社会問題が子どもたちに大きく関係している」ということです。日本は先進国の中で最も、雇用、教育、医療、社会福祉制度等に公的予算を使っていないと知りました。リーマンショックにより失業する親や、不安定さを残す非正規雇用の親の増加。不安定な状態になった大人に手を差し伸べる方法も少ない、等による社会の問題により、矛先、影響が最終的に子どもに向けてしまっているとのことでした。日本の社会の現実を実感し、胸が痛みました。

反対に、フランスでは有給休暇取得の充実や、新米ママの子育てサポートの充実等、大人を支援する制度が非常に潤っていることも知りました。理由としては、“政府が国民からの抵抗や反応(デモ活動)を恐れているから”と挙げられていましたが、単純になぜ日本とこんなにも違うのか?と疑問に感じました。どうしたら日本もフランスのような形に近づくことができるのか?とも感じました。あまりの差に驚きました。

悲しいなと感じたことは、「日本の子どもの社会経験の少なさ」という問題についてです。お誕生日をお祝いしてもらったことがない。家族と旅行に出かけたことがない。会話のない食卓…。このような現実の子どもたちもたくさんいるそうです。親は子どもを育てるために、一生懸命働いている。それは子どもたちも成長するにつれて感じるようになると思います。頑張っている親にわがまは言えない…。いい子でいないと…。と感じる子もいると思います。何かゲームを買ってくれるのかも嬉しいけど、子どもたちが一番求めていることは、大好きな親と一緒に過ごす時間。大好きな親から愛されていると実感できることなのかなと感じました。子どもたちが大好きな親との時間が少しでも増えるようにするためには、頑張る大人を助ける支援や存在がもっともっと必要なのだと感じます。

さらに「子どもが、子どもや家族の面倒をみることも当たり前になってきつつある」と仰っていました。先日あるドラマをみて、このような子どものことを“ヤングケアラー”と呼ぶことを知りました。しっかりしているようにみえても、やっぱり子ども。自分が頑張らないと、と無理をしすぎてしまう、我慢しすぎてしまう子どもたちが大人たちの目から埋もれていかにように、手を差し伸べてあげられる大人の存在も必要不可欠であると感じました。

続いて、いくつかの映像から感じることもありました。父親が母親に暴力をふるう姿を見た幼い子どもの「ボクのせい?ボクがいい子になるから」という言葉。堀場先生は、「自己否定感が MAX になってしまう。施設にいる子は 100%そう」と仰っていました。また、父親から虐待を受けている女子高校生。虐待を受けているにも関わらず、父親のことを悪く言

いません。自分が悪いわけではないのに親を責めずむしろ自分のことを責めてしまったり頑張りすぎてしまったり。子どもにとっては、どんなに周りの大人が優しく受け入れたとしても、自分の親への愛情を一番にずっと変わらずにもち続けているのだと再確認しました。親子という関係性の絆ってすごいなと感じました。

もし、虐待を子どもからカミングアウトされたら？ということをおとさんと考えました。“親を悪く言わない”、“受け止めてきく+話してくれたことを感謝する+あなたは悪くないと伝える”、“自分ひとりで勝手に判断して行動しない”という大切なポイントを教えて頂きました。学童の中でも全く関係のない話ではないと感じます。実際に今までに、辛かったのだろうなと感じる話を子どもから聞いたことがあります。どう声を掛けたらいいのか迷いました。辛い思いをしながらも、きっと勇気をもって吐き出してくれた思い。気持ちに共感してあげたいけれど、でも簡単に「わかるよ」とは言えないことです。自分にできることも限られています。上記のポイントを大切にしながら、辛い時は吐き出していいんだよ、吐き出していい場所だよ、と伝えたいなと思っています。子どもたちが辛い時に、頭の中に指導員や学童の存在が思い浮かぶといいなと思います。その後どう手を差し伸べてあげられるかは、決して自分ひとりの判断ではなく大切に共有をして慎重に考えていきたいなと感じました。

障がいをもつ子どもたちを見守る教師の映画。ある教師の言葉がとても心に響き印象に残っています。「ボクたちの仕事は、与えるとか教えるとかじゃない。子どもたちから学んだことを返していくこと」「子どもを叱る時に教師が興奮しちゃダメ。子どもたちに迷惑かけられるのが教師の仕事だよ」という言葉です。大人と子ども、教師と生徒という関係でどちらの方が上とか下とかではなく、目の前にいる子どもをひとりの人間として捉え、同じ目線に歩み寄っていくことの大切さを改めて実感しました。広い心と、ながい目で根気強く関わっていくためには、目の前の子どもの気持ちを知ろうとすること。子どもに対しての敬意を忘れないことを大切にしていきたいと改めて感じました。

「この子の顔を見てごらん。すごく集中している時の顔だよ」という教師の言葉から、普段からどれだけこの子のことをよくみているのかがあらわれていると思いました。すごいと思いました。よく母も「あなたの帰ってきた時のただいまの声をきいただけで、もしくは表情をみただけで、話をしなくても、今日1日どうだったのかなんて、なんとなくだけで分かるよ、だって親だもん」と昔からよく言うことを思い出しました。自分の気持ちを表すことが難しい子どもたちもたくさんいます。また堀場先生が「子どもたちの言動と本音は逆のことが多い」とも仰っていました。その中で、“よくみて”、“よくきいて”、子どもの様子、そして心の中にある本当の気持ちを、理解できるように、寄り添うことができるように、引き続き経験を積み重ねていきたいなと感じました。

最後に、虐待を受け施設にやって来たある男の子が「生きてるだけで幸せやん」と言っていました。とても心に残っている言葉です。子どもも大人も、きつと言わないだけでみんないろいろな困難を抱えながら日々頑張って生きていると思います。周りとは比べてしまいが

ちですが、子どもたちと過ごさせてもらっていること、仕事をさせてもらっていること、等目の前のひとつひとつのことに感謝の気持ちを忘れずにこれからも過ごしていきたいなと感じました。